

現在日本赤十字社はフィリピン赤十字社と共にフィリピン共和国ルソン島北部で保健医療支援事業を展開しています。事業地はヌエヴァヴィスカヤ州カヤパ郡と、オーロラ州ディラサグ郡ですが、現在私が駐在するヌエヴァヴィスカヤ州カヤパ郡での活動を報告いたします。

事業地の特色と「疾病予防」の大切さ

皆さんはフィリピンと言えば、何を思い浮かべますか。真っ青な海、白い砂浜とヤシの木でしょうか、バナナやマンゴーなどのトロピカルフルーツでしょうか。カヤパ郡はフィリピンの北部山岳地域にあり、標高1500mから2000mにあるため、フィリピンのほかの地域よりも気温が低く、日本の秋から冬を思わせるような気候です。また、景色も南国の植物に加えて松の木やススキが生い茂る場所もあり、一瞬日本の山の中に迷い込んだような雰囲気があります。舗装された道路はほとんどなく、ひどいところは人が歩いてようやく通ることができる山道があるのみです。観光地化されたフィリピンのイメージとは全く違う、まだまだ古き良き伝統が残る地域です。

このようにアクセスが困難な場所であるため、日本のようなインフラ整備が難しく、安定した電気供給はもちろん、水道設備も整っていません。安全で安定した水の確保の問題から、下痢をはじめとした予防可能な感染症にかかり苦しむ人も少なくありません。また、車両通行が難しいため、病気にかかってしまった場合は、その人を病院のある町まで担架で何時間もかけて運ぶしかないので。そのため、病気にかからないこと、つまり「疾病予防」が非常に大切な地域であると言えます。

住民の力を活かした健康増進を

日本赤十字社とフィリピン赤十字社が共同で行うこの事業はCBHFA(Community Based Health and First Aid)という手法を使って行われています。これは国際赤十字赤新月社連盟が推進している手法で、赤十字のボランティアが草の根で疾病予防や健康増進、救急法の推進などを行っていくものです。地域の住民から地域保健ボランティアを募り、彼らが地域の健康問題は何かを分析し、それに対応する健康教育を住民対象に行うことで地域の健康状態を向上させます。赤十字の保健職員がもつ専門知識を基に、その情報を必要があれば地域に根付く方法にアレンジし、「地域で得られる資源で」、「誰に」、「どのように」伝えるのが一番効果的かを考え実行するのは、地域住民である赤十字ボランティアでなければできないことです。

一方で、ボランティア活動はモチベーションの維持が難しいことが課題の一つです。無報酬で、自分たちの生活と両立しながらやっていくには、彼ら一人ひとりがやりがいを感じないとはいけません。

あるボランティアの話

Aさんはある日、ボランティアをやめたいと言い出しました。

私たちは、彼女がなぜ突然そう言い出したのか、じっくりと話を聞くことにしました。最初は、「ボランティア活動が面倒くさいから」という理由を言っていた彼女は「私は高校も卒業していないし、みんなが私の話をちゃんと聞いてくれないと思う」と明かしました。フィリピンの文化では他の多くの国同様、学歴、肩書がいろいろな場面で強く影響します。そのため、人前でメッセージを伝える役割を担うには分不相応だということです。彼女の思いを受け入れてから、私は、「ねえ、Aさん、私をみてよ。わたしは、カラヌヤ語（現地語）も話せないし、タガログ語（国語）だって上手にできないんだよ。誰にでも弱みと強みはある。あなたは、カラヌヤの言葉を話すし、なによりも地域のことを本当によく知っている。こういう山の中で病気を予防するのがとても大切な中、あなたが地域の人に健康のことを伝えるというのは『この地域をあなたが守っている』ということだと思うよ」と伝えました。彼女の表情は次第に明るくなり、その後も活動に参加してくれました。しかも、チームの中で一番堂々と保健教育をすることができたのです。彼女にとって、誰にでも弱みと強みがあることを実感できたこと、そして、赤十字のボランティアとして地域を守っていると思えたことで、学歴という彼女のコンプレックスを乗り越えて活動に前向きになってくれたのではないかと思います。

私たちの事業に関わるボランティアの多くは女性です。子育てをしながら、農業をし、そして赤十字活動も行う。それを支え、モチベーションを維持していくためには、ボランティアさんがそれぞれに認められているという居心地のよさをつくるのが大切なのだと実感した場面でした。

事業のこれから

この事業は2014年から始まり3カ年計画で進んでいます。CBHFAでは引き続きボランティアを中心として、災害時のレジリエンス（回復する力）を向上させる活動を行っていく予定です。また現在はCBHFAと並行して、水衛生教育(Children Hygiene and Sanitation Transformation)を小学校の生徒を対象に行っており、今後はトイレや水衛生設備の建設や改修を行っていく予定です。

保健要員研修生として

臨床経験しかなかった私にとって、地域保健はすべてが新しく、すべてが挑戦の連続でした。世界ではいまだ病院施設でケアを受けられる人はほんの一握りで、社会的・経済的・地理的に様々な問題で医療を受けられない人が多くいます。そのような人々が、健康で豊かに暮らしていけるよう、国連の持続可能な開発目標 (SDGs) のコンセプトである「No one left behind（誰も置き去りにしない）」を達成できるよう、政策と並行した草の根の活動が

非常に重要だと感じています。その意味で、世界で活動するボランティアの存在は赤十字にとって一番の強みだと思います。

また赤十字の活動は、多くの支援者の協力があってこそ成り立つものだという事も同時に実感しています。多くの方々の支えを十分に活かし、地域に貢献していけるよう引き続き頑張ってまいります。



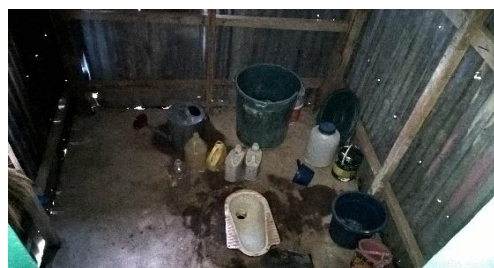
赤十字ボランティアとのミーティングの様子



赤十字ボランティア・職員と共に保健教育のため山道を歩いて行く様子



水道がない地域で小学生と手洗い練習をする場面



現地で一般的なトイレの様子



電気、ガスがないため竈（かまど）で煮炊きする様子 ※水は、ため水をやかんで沸かして飲用とする（現地の住民は生水を飲むことも多く、下痢の原因の一つ）



事業地の風景